

114
A 5190
1

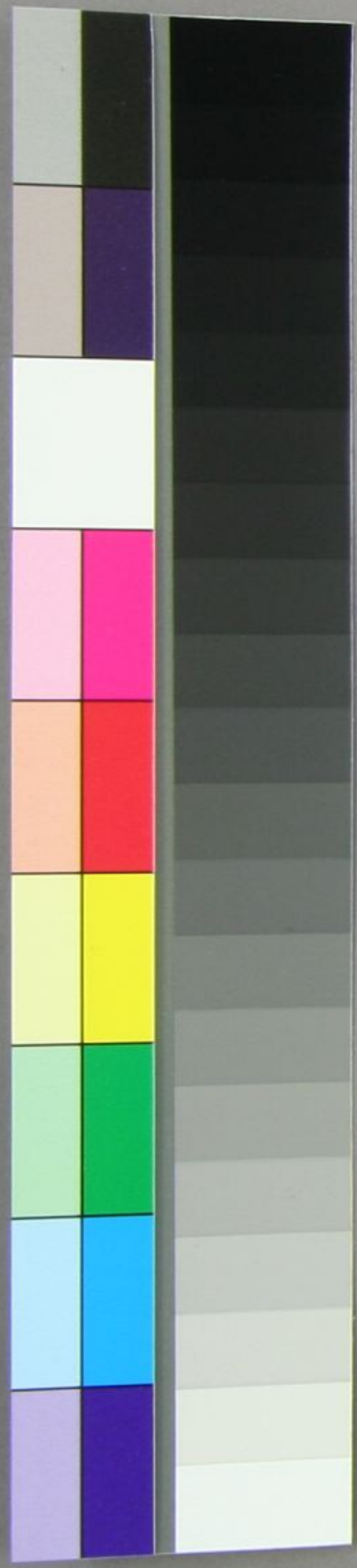


三池石炭ヲ清國へ販賣ノ議ニ付願書

御國産中目今清國へ輸出販賣ノ相成候品類ハ各種
者之候得共就中石炭ノ要需最多ニシテ漸次盛昌ニ
赴クノ勢ニ相見候得共頃日聞知スル處ニテハ彼邦ニ於テ
モ煤炭採採ノ業ハ大ニ注意スル要アリテ現ニ吳淞ノ鐵道
軌ヲ臺灣ニ移シテ炭坑既通ノ便ヲ開キ又天津牛莊
邊ニテ新ニ炭坑開鑿ノ事ヲ起シ候趣ニ者之差其
言實ニシテ更ニ其開採ヲ増シ而シテ我邦ヨリ輸送販賣
ノ業ハ却テ依然舊途ヲ蹈ムニ於テハ遂ニ此石炭ノ高事ヲ
退却シテ我カ利害ヲ失フニ至ランモ亦不可測儀ニテ最以テ
緊切ノ時機ト奉存候就テ思惟仕候ニ現今官行ノ三
池石炭ノ如キハ其産出モ巨額ニシテ開採ノ費用モ低廉
ナルト奉存候間此度書石炭ヲ清國へ輸送販賣ノ事

大正十一年四月
隈侯爵邸寄贈

A 3200



當社(脚委任社)下度候然ル上向後殊ニ精念勉力シテ
 一層低價競賣ラ為シテ彼邦創業者ノ途ヲ沮止シ善
 我石炭ノ要需ヲ增加セシムル様可仕奉存候尤モ此石炭
 販賣ニ付テハ別ニ運送船ノ供給無クテハ先令ノ輸出仕
 候ニ付右船舶購取ノ費ニ併セテ拜借仕此石炭輸送
 運賃ヲ以テ其元利ヲ年賦支消候様仕度奉存候
 依テ別紙要款並ニ計算書相添此般奉願候也

明治十五年 月 日

大藏卿大隈重信殿
 工部卿伊藤博文殿

三池石炭ヲ清國へ販賣ノ儀ニ付要款

第一

三池石炭ヲ清國へ輸送販賣スル高ハ毎月五千噸ツト
 豫定スヘシ尤モ販賣不景氣ナレハ實地ノ景状ヲ工部省
 具申シテ適宜其高ヲ減却スルヲ得ヘキ事

但高業上進シテ販賣増加スル片ハ勿論輸出高モ相
 増シ可申事

第二

右石炭ノ代價ハ口ノ津港ニテノ受渡シニテ塊炭壹噸ニ付
 金壹圓五拾錢ト定メ三池炭坑ヨリ口ノ津港迄ハ工部省ノ費
 用ヲ以テ輸送シ口ノ津港ニ於テ上海輸送船へ積取ルヘキ事

第三

右積取ハ口ノ津港ニ於テ石炭ヲ積取リ候ニ付テハ此船舶ニ限リ

同所より直に清國地方へ輸送し候は特別に御許可可被下事

第四

前條ノ煤船に付此煤船に載送スル石炭に限り輸出税及其船舶ノ出入港税等一切所免除可被下事

第五

此石炭ヲ販賣スルハ専ら上海ヲ以テ目途ト仕候得共商業ノ景況ニテ他ノ清國地方へ運販可仕候事

第六

石炭販賣ノ價格及其販賣ニ付テノ費用ハ別紙甲号ノ計算書ヲ目的トシテ取扱フヘキニ付販賣セシ石炭勘定書ハ毎月精細に取調其翌月々初報書ヲ工部省ニ差上可申尤モ其勘定元帳モ何時ニテモ御検査ヲ受ケ可申

事

第七

此石炭販賣ニ付相當ノ費用ヲ引去リ別紙計算書ニ準據シテ剩餘ノ純益金ハ別段に積立置キ萬一他日石炭ノ市價低下スルコトアルモ其積立タル利益金ノ半額迄ハ此販賣ノ補償ニ供シテ第二條ノ定價ヲ相保可申事

第八

此石炭販賣ノ年限ハ拾ケ年トシ而シテ其定價ハ五ケ年間ハ第二條ノ通り相定メ六ケ年目に至リテ更其向五ケ年間ノ定價ヲ議定スヘキ事

第九

石炭積貯ヲ新購ノ代價ハ別紙乙号計算書ニテ金拾貳萬圓ヲ大蔵省より御貸下可被下事

第十

右船代ニ充ル拜借金ニ年六歩ノ利息ヲ添ヘ拜借ノ年ヲ貳拾ケ年賦ノ利附割濟ト相定メ毎年ノ二月中ニ元利割合上納可仕候事

第十一

右拜借ニ對スル抵當ハ該船舶ヲ以テスルニ付年賦金皆濟ニ至ラサルノ間ハ右船舶他ニ抵當ニ供スル等ノ一ハ仕間敷且其船修繕等ハ時々充テ整理ヲ加ヘ置可申事

第十二

乙号計算書ノ見込通り該船ニ屬スル費用ヲ引去リ剩餘ノ純益全有之ハ其半額ヲ別途務備金ニ積立置他ノ半額ハ年賦期限内ニシテ拜借金ノ中ニ返納可仕候事

第十三

右船舶ニ付テノ損益勘定書ハ毎月精細ニ取調其翌月月初ニ報告書ヲ大蔵省ヘ差上可申尤モ其勘定元帳及其船舶ハ何時ニテモ(船舶ハ運送ノ時間ヲ妨ケサルニ)脚按查ラ受ケ可申事

右要款ノ通御聞届被下度候也

明治十五年 月 日

大蔵卿大隈重信殿
工部卿伊藤博文殿

東京

第一國六銀行

